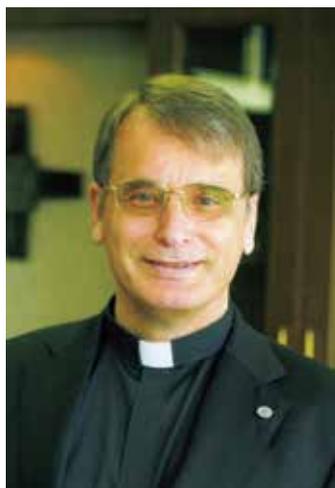


# 南山大学同窓会三重支部 50周年記念誌

「世代を超えた絆」





このたびは南山大学同窓会三重支部発足50年記念誌の発行、誠におめでとうございます。

南山大学同窓会三重支部発足50周年記念祝賀会に参加して、私は改めて大学の影響力というものについて考えさせられました。この影響力を測る指標とは果たして

何でしょうか。週間東洋経済による「本当に強い大学ランキング」や有名教授の研究結果などの目に見えるランク付けや成果は、確かにひとつの指標になり得るでしょう。もしくは志願者を惹きつける魅力的なカリキュラムや華々しく活躍する体育会の強豪チームが、大学の影響力を示すことになるかもしれません。このように社会や志願者に対して影響を与える要因はたくさんありますので、南山大学も各分野で努力を続けています。

しかし、大学の影響力を具体的に表す指標には、もうひとつ大事な側面があります。それは、南山

大学で学んだ学生が卒業後、何を持って社会に出るのかということです。在学中に築いた友情を維持し、そこで学んだアイデアを定期的に語り合う友人間のサークルや、貴重な理想を共有する同窓会こそ、その最良の具体例だと私は思います。つまり、社会に出て活躍する卒業生こそ、南山大学の本当の力を具体的な形で示してくださるのです。個人、サークルや同窓会といった卒業生による活動が、今後、国内だけでなく世界中で南山大学の良さをアピールすることになることを私はますます期待しております。

三重県出身の現役の学生を交えて同窓会三重支部の皆様とお祝いした50周年記念祝賀会、そして本記念誌を通じ、南山大学の「人間の尊厳」の精神を再確認できたことを私は非常に嬉しく思います。同窓会は母校を離れることでより大きな存在感と意味を持つということに在學生とともに気付かされたと共に、まさに同窓会は“a home away from home（まるで我が家のようなところ）”なのだ痛感した次第です。

同窓会三重支部のますますの発展を祈念するとともに、今後も母校・南山大学が世界に耀くという使命を果たすことができるよう変わらぬご支援をいただければ幸いです。



南山大学同窓会三重支部 50 周年記念総会 平成21年6月14日 四日市シティホテルにて

## 三重支部創立50周年をお祝いして

同窓会長 森 本 侑



三重支部同窓会が創立50周年記念総会をミカエル・カルマノ学長による、記念講演並びに懇親会と盛大に行なわれまして心よりお祝い申し上げます。

また、支部の皆様方には日頃より同窓会に御理解を頂いておりますことを感謝

致します。

1959年初代として小林支部長が就任され多大なご尽力により、三重支部が誕生致しました。

当時、東京支部が創立されており、すぐ後に三重支部が創立されその後関西支部・岐阜支部が創立され4支部となりました。

1980年代に、私も同窓会の一員となり、小林支

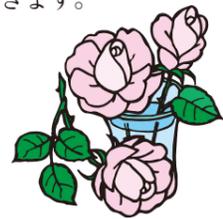
部長には同窓会の発展の為に色々と薫陶を受けた思い出があります。その後、2代目武藤支部長に代られ改革を進められ壮盛期を築られました。

そして、3代目坂寄支部長に代られ50周年を盛大に迎えられました。

現在、母校は瀬戸キャンパス・名古屋キャンパスと両方合せ1万人近い学生数となっております。

また、毎年2千数百名が卒業されており、同窓生の人数も6万人近い大きな組織となりました。

三重支部も現在同窓生も3,300人を超えております。最後になりますが、三重支部が坂寄支部長の元益々発展されることを祈念し、また同窓会も2012年には60周年を迎えることをお伝えしてお祝いの言葉とさせていただきます。



南山大学同窓会三重支部 50周年記念総会 平成21年6月14日 四日市シティホテルにて

## 私と南山

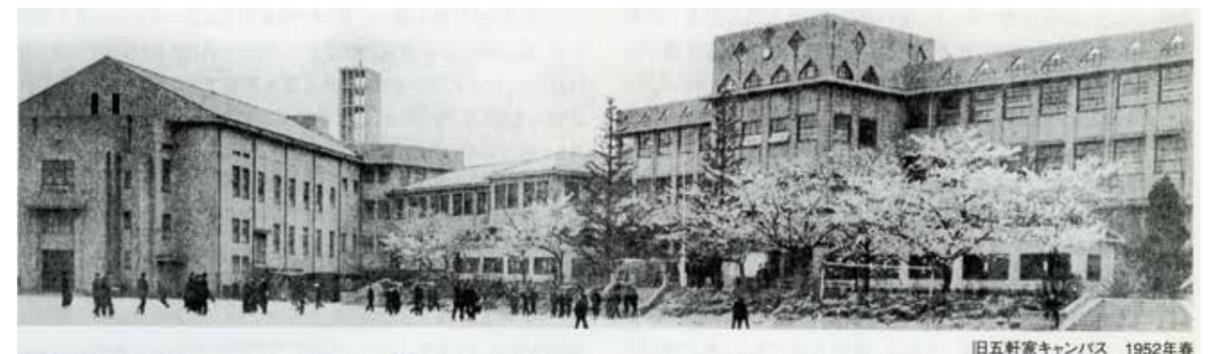
初代三重支部長 外専1期英文科 小林 安 夫

早いもので今年（平成21年）は三重支部発足以来、満50年の節目に当たり支部誕生、そして一時期その運営に携わった一員としては感無量で御座います。同窓会が昭和27年正式に誕生、その後東京支部に続いて吾が三重支部は2番目の支部として昭和34年に活動を開始し、毎年一回卒業生の多い北勢地区の四日市を中心に支部会を開き出席者も発足当時20～30人（150人位の支部員の場合）が集まり家庭的な雰囲気各人が自己紹介をしながら相互の友好を計り、近況報告の中での悩みがあればその相談に乗るなど支部の「名物コーナー」と他支部より評価されていましたが、支部会出席者数が段々と多くなって維持することが難しくなり今では発言希望者を2～3人に定め短い時間制限を行わねばならず、大変寂しい極みです。現在支部員数は3千数百人と思われませんが、出席いただく方々は80名位で100人の大台に乗らず毎年目標は100人超でその実現に努力しましたが不成功が続

いていました。而し50周年の出席者は130名近くになり記念写真も2回に分けて撮らねばならず嬉しい悲鳴をあげ幹事諸兄の集人力の強さをまざまざ見せつけられました。今回の記念行事の一つに「ホームカミングデー」当日山里、瀬戸両キャンパスにバスにて訪問いたし、広い敷地に立派な校舎の数々、設備の充実した研究棟にて勉学に勤しむ後輩達は何と幸せなことだろうと思いました。最近の「個人情報保護条例」が会合の出席名簿の「住所」「職業」の項目は削除されており初対面の人々の集まりには何かと不自由になっており、このような世相ですから平素からより一層の会員諸兄姉との連絡を取る努力が肝要です。同窓会活動は一部の特定の人々で運営されるのではなく全会員に夫々その一端を握って貫って益々の充実、発展を図るべきと思われれます。三重支部も次は5年後、10年後に目標を持って堅実に大きく進んで行きましょう。



南山大学三重支部人会 昭和31年5月



旧五軒家キャンパス 1952年春

## 三重支部創立50周年を迎えて

南山大学同窓会三重支部が創立50周年を迎えました。昨年（2009年）の6月14日には盛大に創立50周年記念総会を開催していただきました。また、11月3日には、同じく創立50周年を記念して、バスをチャーターして瀬戸キャンパスを見学し、続いてホームカミングデーに参加するという行事を組んでいただき、大成功を取れました。坂寄支部長さんをはじめ幹事、ならびに関係者の方々に心から感謝いたしております。

省みますに、1956年に初代支部長の小林安夫様から南山大学卒業生三重県人の会の通知をいただき参加させていただいたのが、私と同窓会とのつながりの最初でありました。この会が1959年に南山大学同窓会三重支部と発展し、ここにめでたく創立50周年を迎えることになりました。

その間、初代小林支部長はじめ幹事の方々のご尽力により、総会への参加者は次第に増加してまいり、初めの頃は、一人一人が自己の近況報告をしておりましたが、今ではそうする時間はなくなってしまいました。組織が大きくなれば、集まっ

## 南山大学同窓会三重支部設立50周年記念誌発刊に際して

三重支部現支部長 坂 寄 克 彦

三重支部同窓生の皆様には、日頃より支部活動に温かいご支援・ご協力を賜り誠に有難うございます。支部活動も本年で50年の大きな節目を迎えました。言うまでもなく、1年1年の積み重ねで今日のような活発な展開が可能になった訳ですが、その間の諸先輩方のご努力には敬服するのみでございます。

初代支部長小林安夫様には、41年もの永きに亘り支部を牽引していただきました。設立当初からの様々な不自由さのあった中で、支部発展のため、色々と工夫をされ、一人でも多くの同窓生に参加していただき、会員相互の親睦の輪が広がるようにと努力をされました。

2代目支部長武藤武様は、長年に亘り初代支部長に協力されて、その経験の上に、新しい世代にも合うような総会の持ち方も採り入れられ、7年間支部の取り纏めをされました。

三重支部二代目支部長 武 藤 武

ていただく会員の方々に満足していただく会の運営方法にも一工夫も、二工夫も必要になります。100名以上の会員に集まっていただく魅力ある会にするために幹事の方々にいろいろすばらしいアイデアを出していただき、50周年の会にはついに100名を突破する、他支部では見られないほどの総会となりました。坂寄支部長さん初め幹事の方々のご尽力に感謝いたしております。

しかも三重支部の総会の特徴は、お集まりの方々が外専1期の方から新しく卒業生された方々まで年代のバランスと、男女のバランスがよいこととあります。最近では男性会員よりも女性会員の参加の方が多いいのではないかとと思われるほどになりました。

南山大学同窓会三重支部が、同窓会本部の発展とともにますます発展していくことを衷心より願うものであります。それには、刻々と変化する時代に合った支部運営が必要になってまいります。支部長さん初め幹事の方々には、まことにご苦労をかけますがよろしく願います。

私が3代目支部長を仰せつかってから早2年余が経過いたしました。同窓会本部の姿勢も少しずつ変わり、現在は支部・南山会の位置付けも関係者のお蔭ではっきりとしてきており、やはり歳月の歩みは着実に進化をしていると確信出来る今日の状況であります。しかし、毎年の同窓会活動は大きな変化を求める性質のものではなく、さりとしてマンネリに落ち込むことは論外です。同窓会支部は、近隣の会員の皆様が、より深い信頼の輪で繋がれ、厳しい実社会の中で、共に励まし合い、助け合いながら、お互いに高められるような集団でありたいと思います。そのためにも、親睦の充実を努めてゆくことが第一義だと再確認し、50周年の記念事業の一つであるこの記念誌が、皆様お一人お一人と南山大学との係わり合いを見つめ直す一つの手懸かりになることを願っております。

## Hominis Dignitati

[人間の尊厳のために]



初代南山大学長 アロイジオ・パッヘ  
在任期間 1949～1957  
夢の大学完成予想図を掲げて 学長室にて（1951年頃）



第3代南山大学長 ヨハネス・ヒルシュマイヤー  
在任期間 1972～1983

第2代南山大学長 沼澤喜市  
在任期間 1957～1972

私は名古屋（南山と後に校名変更）外語専門学校の第三期生です。まさに南山大学の揺籃期でした。南山への思い出も半世紀以上も経過している今、記憶違いもあるとは思いますが、その点ご容赦下さい。

### 入学

終戦後三年目昭和二十三年（一九四八）四月、当時の校舎は五軒家町にあり、発足したばかりのこじんまりした少人数の学園でした。中部地方を管轄する進駐軍のGHQは広小路通りの大和生命ビルにありました。日本の将来がどの様に展開するのか誰もが見当がつかない混沌とした時代でした。国内は食糧難で闇が横行しインフレが加速していました。

当時の国公立の専門学校の月謝は月額四百円でした。南山は確か六百円で私立校としては安かったと記憶しています。

学部は英語科、仏文科、独文科、中国科があり、英語科だけが定員が他の科の二倍の百名でした。受験者数は約六百人位だったと思います。英語の入試面接はパッヘ学長自ら行われました。当時語学は南山と云われ、東海地区のインターカレッジの英語弁論大会では南山の優勝が決まっていたものです。

### 学長のアルバイト斡旋

パッヘ学長がアルバイトを斡旋してくれました。学長は学園外でのアルバイトは必ずしも職場環境が良いといえず学生がスポイルされてはとの心遣いからピオ館やキャンパスの草刈りの仕事を与えて貰いました。アルバイト時間は放課後でしたので授業は全く支障はなく大いに助かったことを覚えています。

### 野崎勝太郎教授

この方は戦後の学校制度の改革により旧制第八高等学校が名古屋大学に編入されたのを機に南山に転職されてこられた英語の教授でした。実家は静岡県の造り酒家の息子さんとか・・・。  
東京帝国大学英文科で芥川龍之介と同期で「芥川君が一番で僕が二番だった。」と自慢げによく話されたものでした。当時の私にとって芥川龍之介は遠い明治の人位いの認識しかなかったので「将

か、本当かいな、一体野崎教授はおいくつなの？」と驚いたものです。（芥川氏、昭和二年夭折）この先生大変口が悪く、特に女子学生は大変な被害にあったものです。私のクラスは女子学生は三人程で圧倒的に男子学生が多かったのですが、現在この比率が逆転しているようですね。

### 南山の背広生地

パッヘ学長には夢があった。それは南山の学生にスーツを着せることでした。空爆で一面焼け野原になった当時の日本では純毛の背広生地は絶対に存在する筈がなかったのです。

繊維技術だけ僅かに残っていた日本は原毛を輸入して生地加工、輸出し僅かな外貨を稼ぐのが精一杯でした。そんな生地を学長は政治力で仕入れてきて私達に斡旋して貰いました。値段は一着分で四千五百円位だったと思います。ところが、どこの世界にもクラスの中に一人や二人商才に長けた学生が居るものです。高い値段で買い取るというので、私は喜んで六千五百円で売却し二千円の利益がありました。月謝の支払いに大助かりでした。

ところが後で判ったことですが、当時の大須の洋服屋へこの生地を持ち込むところ「南山の洋服地ならブランドもの」として無条件で一万五千円で買い取ってくれるとのことでした。「しまった！！」と思ったが後の祭り。

学長は何時まで経っても学生がスーツを着てく様子がないので、転売しないことを条件に再度斡旋してくれました。私はこの二回目の背広地を仕立てて就職しました。結局南山へスーツは着て行くことはありませんでした。

### パッヘ学長

学長は象牙の塔に閉じこもっておられる人ではなかった。時間があれば授業をスキップする学生がいなかったかキャンパスの内外を巡回されていた。政治的にも経済的にも南山の揺籃期にはなくてはならない学長でした。学長がもしご存命ならばどの様な目で今の南山大学を見ておられるだろうか。

### ○アロイジオ・パッヘ学長

学長はおっしゃっていました。「私は数カ国語を話すが、一番得意なのはフランス語です。」学長が当時（昭和二十五年頃）まだ珍しかった大型オートバイに乗って、颯爽と大学本館の前の道路を飛ばして行かれた雄姿は今も忘れられません。

### ○沼沢喜市副学長

先生からは、哲学概論のようなものを習いました。先生は「シスイ」という言葉を、講義の中で何度も発音されました。「思惟」の意味なのか、それとも「思推」を考えておられたのか。今もってわかりません。外国生活の長かった先生は日本語の発音がやや不自然でした。

### ○野崎勝太郎先生

先生は、旧制第八高等学校（現名大）で長年教鞭をとられ、その令名は高く、むしろ雷名に近いものがありました。私は、卒論提出まで、先生のご指導を受けました。英語の演習には、マシュー・アーノルドの「評論」やウォルター・ペイターの「スタイル論」等を使用しました。難解そのものでした。先生の毒舌はつとに定評がありました。とりわけ、女子学生は気の毒でした。「訳してみたまえ」と当てられます。徹底的にけなされてついに泣き出そうも

のなら「だから女は駄目なんです。知性というものが全くありませんからね。そんなことでは、学問なんてとても出来ませんよ」とくる。当てられて、英文を読み出そうものなら「読まなくてよろしい。直ぐに訳したまえ。どうせ読めやせんのだから」とやられる。野崎さんには本当に鍛えられました。有難いことでした。

### ○ベルナルド・ウイلمス神父

神父からはフランス語を習いました。「何々して下さい」と言うところを、必ず「何々して下さい下さい」とおっしゃいました。

忘れもしません。私の父が着物にブーツを履いて、私に会いに大学へ来たことがありました。（当時私は、覚王山のある寺に下宿していました）大学校舎の廊下で父がたまたまウイلمス神父に私の居所を尋ねたらしいのです。神父はわざわざ私達のいる教室まで来て「ムシュー・カジ、ヴォトル・ペール」といって私を呼び出して下さったことがありました。（ちょうど休憩時間中でした）私は父と二人で大学の裏山を散歩しながら話をしました。これが、私が生きた父を見た最後になってしまいました。

同窓会の発展は大学の発展につながると、よく言われます。同窓生が社会で活躍すれば、それだけ出身大学の人気が高まり発展することは言うまでもありません。しかしまた大学が、すばらしい卒業生を世に送り出してくださいませと、同窓会もいっそう発展するものです。私は今、桑名市にあります私立の津田学園につとめております。私の学園には現在私を含めて5名の南山大学卒業生が教師として勤務しております。私以外のこの4名の若い卒業生は全員非常にがんばってくれます。学校の仕事は勿論ですが、同窓会の運営にも大変協力的で、支部総会にも全員参加してくれます。

やはり、仕事もできなればいけません、幅広くつきあいのできる大きな心が必要です。南山大学の教育や、大学の雰囲気がある人物を育て

るようになっているのでしょうか。「人間の尊厳」をモットーにしている我が南山大学がいつそうこういった優れた人物を世に送り出してくださいませを期待いたしております。



大学同窓会三重支部創立50周年記念誌への出稿を依頼された。

半世紀以上にわたりこの活動にたずさわられた多くの先輩方、同期、後輩の諸兄姉に敬意と感謝を表したい。

会社員生活を卒え、ふるさとを、「終の棲家」ときめて暮らす今、在学時代の回想と、今の感懐を綴って、つとめをはたそうと思う。

1956年4月に始まり60年3月に修了した、自分が南山大生として過ごした日々を振り返ってみたい。

1、2年次の頃、近鉄の急行が諏訪駅（1956.9路線短絡化四日市駅と改称）から富田、桑名と停車し、木曾三川を渡る鉄橋は古い単線構造（1959年伊勢湾台風後改軌新設）だった、やがて地下の2面3線ホームの名古屋駅に降り立ち、駅前から『60』系統八事行きの市電を使って通学した。広小路通りを東に向かい栄町、武平町、東新町、新栄町、車道、千種橋東から今池へ、右折して大久手から左へ飯田街道に入り、青柳町、安田車庫前、宮裏、砂ほこりの舞う川原通、山中町そして「いりなか」へ、これが五軒家町の学舎への道筋であった。

「Hominis Dignitati」と掲げられた玄関の横を進み人類学研究所と、図書館前を過ぎ、十字架そびえる教会前にグラウンドが開けていた。この通学は1時間30分以上をかけた鉄道ファンの自分には楽しい時間であった。この頃は、社会哲学、自然法、経済史、外書購読などに思いめぐらせたもともと学生らしい時期であった。学内では多くの知己友人ができた。麻雀に勝ったおまえはカツ丼、俺は、うどんだと体育館下の学生食堂での語らいや、時には、奨学金が出たといって、トリスのハイボールにありつけると、はしゃいだ仲間との友情、後に各地各界の活躍した多くの友との交流は今も続く。あれから50年、懐かしいなと思う。

3、4年次になって通学ルートを変えた。名鉄新名古屋から金山橋駅へ、アーケードを上って市バス沢上停から、高辻、桜山、経由、川澄町を左に折れて石川橋で下車、山坂を登って学内へ。この車中、小さいバッグを身体の前に下げてキップきりはさみをチャンチャン鳴らしながら「次は沢上、お降りの方、お知らせ願いまーす。次、停車願います。」と乗降口近くに立ってけなげに働いた、赤い頬つぱたの、みつ編みの似合うあの車掌さん、同年代の彼女たちは今もお元気だろうか。

金山橋駅前のアーケード坂道を「うれしがらせて、なかせて消えた・・・」、「・・・赤いランプの終列車」、「春には柿の花が咲き・・・」と、かっこよく口ずさみながら、一緒に通ったあの友は、自動車部品会社を設立、中堅会社に育て上げ、最近経営を若い人に継ぎ、健在と聞いた。その頃男声コーラスの人が歌った「静かな夜更けに、いつもいつも、思い出すのは、お前のこと」今、この唄のところがいいとおしい。

わたしたちの学位授与式で、初代のパッヘ学長を継がれた沼沢喜市学長が「威風堂々」と入場、「南山の卒業生諸君が全世代に広がる時代が来たとき、この学園で培われた人間力がフルに発揮され、社会から役立つ人材として高く評価される時代が来ると確信する。諸君の健闘を祈る。」と激励された日のことを思い出す。

あれから五十年、会社員の生活を卒え、人生の第二ステージを過ごす今、日常生活で多くの人にお世話になっているが、話しているうちに、その人の人柄に触れ、この人、南山の同窓生だ、違いないと気づくことがある。接するうちに「南山のDNA」が共鳴しあうのだろう。同窓のよしみを通じ合うときは、幸せを感じる時である。若い同窓生の皆さんの活躍を喜び、頼もしく思う。

「人間の尊厳のために」とは、社会生活で、かけがえのない互いの生命を尊重しあい、共に生きていく理念であろう。この「南山のDNA」こそ、地球上いまだにつづく自然破壊、混乱、飢餓、殺戮の現状改革のための核心でありたい。いつの時代にあっても、わたしたちは、「自由と平和、まもりゆく」原動力でありたいと思う。

終わりに、南山大学同窓会三重支部の現会員と将来の会員、皆さまのご健康とご活躍を祈念して、筆を擱きます。



私は、昭和31年（1956年）に文学部英語学英文学科に入学し、昭和35年（1960年）に卒業（英文9回生）しました。当時は笹島から市電（チンチン電車）で今池経由で枳中の旧校舎へ通学しましたが、2年目からはバスに変えました。

この頃の日本は未だ貧しかったのですが、のんびりしたところもありました。しかし昭和34年（1959年）9月末には伊勢湾台風が来襲しました。この年には塩浜コンビナートも操業を開始しており、四日市公害も問題化しておりました。

卒業後は四日市倉庫（現・日本トランスシティ）に入社し、平成10年（1998年）まで38年間勤めました。入社翌年には高度経済成長が始まり、国民は昭和版「坂の上の雲」をめざしていた時代でした。

会社時代の20・30代は四日市港で港運分野の仕事をし、40代は大阪へ単身赴任をし、国際輸送部の立ち上げにも携わりました。50代には三重県のシンクタンクへ2年間派遣され、一年おいてICETT（国際環境技術移転研究センター）へ3年

間出向となりました。

当センターでは平成5年10月（1993年）に今上皇太子殿下・同妃殿下の行啓を受け（三重県民の森での育樹祭の前日）旧東欧3カ国の研修生と環境について直接対話をされるイベントがあり、この進行係をする榮に浴しました。また、国連のLINEP（国連環境計画）に公害を克服した四日市市と同市長に「グローバル500賞」を授与するよう働きかけ成功したことも印象に残っています。退職の前年には、三重県議団のパラオ共和国訪問に飛び入り参加し、K.ナカムラ大統領に面談したことも自慢の一つです。

退職後12年のうち本年3月までの8年間は菰野町教委所轄の英会話サークルの先生役をボランティアでしました。卒業後50年になりますが、いま振り返ってみればこの人生の大部分は英語と係わりのある道を歩んできたこととなります。これも南山で英語をかじったことが機縁になっているのかなと思っている今日此の頃であります。

## 踊り場のピアノ

大9期 英文 加 藤 かよ子

十二歳から正式にピアノのレッスンを受け始めた私のそのころの夢は、誰にも良くあるピアニストになることであった。昭和二十三年に初めて見た「ショパン」の天然色映画の画面と、そこに流れるショパンの音楽に魅せられて、私の兄も姉もピアノの虜になっていた。兄は、予科練帰りで、命を取り留めたものの精神的拠り所を失って荒れていた。姉が旧制女学校から新制高等学校に変わったばかりの松阪高校の音楽の先生にピアノの手ほどきを受け始め、兄も私もその先生のお宅に伺うことになった。バイエルを終える頃、先生は東京に居を移され、私は別の先生につくことになった。しかし、当時のシャウブ勧告で莫大な税金を課せられた両親は、戦前から家にあったグランドピアノを売って、その課税に充ててしまった。その後、学校のピアノを使わせてもらって練習を重ねたが、同じようにピアノを習っている二人の友人に比べて、自分の才能に自信をなくし、また、二人のように、東京に一月に一度通ってレッスンを受けなければ、目指す音楽大学には合格できないと教えられ、

そんな資力もピアノも自宅にない自分には、到底音楽大学には進学できないと、高校三年生の夏休みに諦めることにした。翌年入学した南山でのオリエンテーションで、「ピアノ奏法」を選択できることがわかったとき、どれほどうれしかったことか。しかも、枳中校舎の中央棟の各踊り場の両側の小部屋に一台ずつ練習用のピアノが用意され、自由に使うことができたのである。合計六台のピアノは、ドアを閉めれば音はグランド側に流れ、教室にはほとんど聞こえることはなかったと思う。小津恒子先生のレッスンは厳しかったけれど、憧れのショパンの曲をレッスン中に先生自ら弾いてくださったことは、忘れられない思い出である。



## 南山大学に感謝の心がてんこもり

大10期 英文 宇佐美 覚 了

私は南山大学から受けた恩恵は数えきれません。南山の信用は大きいのです。

大学入学後、経済的、精神的自立を目指しました。一人で歩き回って安い下宿先を探しました。市内に各大学生が十数名、下宿していました。「南山生」と名乗るだけで親戚の者と説明して、オーナーの家族あつかいにしてもらいました。オーナーの家族と食卓を囲みました。外出時には貴重品箱も預かりました。他の下宿生と待遇がまったく違っていました。両親と三人娘の五人があまりにも親切に接してくれるので、長女にあわい恋心をいただいたほどでした。

生活費、学費を稼ぐために、家庭教師、学習塾の講師、証券会社の情報配達人、新聞社のアンケート調査員、喫茶店の店員、知人学生のラブレターの原文書き等と、その数は二十種を超えました。どれも楽しい体験でした。後の人生に役立つことも数多くありました。

私は四年間、家庭教師先を見つけるのに苦勞をしませんでした。「南山の学生」の信用で子供も家族も家庭教師として受け入れてくれました。大学名で

私は信用されました。

就職活動も「南山大学」の名がおおいに貢献してくれました。私は南山大学に感謝しています。私は大学選びに間違いがなかったと今はっきり確信しています。

大学から受けた多くの恩恵に感謝して、少しでも大学貢献したいと次の三点に心してきました。

まず、自分自身が南山卒として自覚しながら自己実現、社会貢献に努力することです。著書二十三点を出版し、ボランティア活動として篤志面接委員など三種類を継続中です。次に教員として在職中に数多くの優秀な生徒を南山大学に送りました。

さらに、全国各地の私の講演活動でプロフィール紹介で南山大学名をあげてもらっています。講演内容の一部に南山生の時の良い体験談を話しています。

いずれにしても、大学卒業後半世紀になります。私の心身は「南山大学に、感謝の心が、てんこもり」状態です。「ありがとうございます」の一言です。

南山大学、南山大学三重支部のますますの大発展を念じているこのごろです。

## 私と南山

大11期 経済 柳 川 憲 一

大学での勉強のことは何故かあまり思い出されません。まず思い出したのは朝が早くて夜が遅い電車で通学のことです。でも、あの時の苦勞がいつも私に「やれば出来るのだ」「あきらめずに継続することだ」と勇気づけてくれる原動力となりました。

大学に皆出席制度があればこれに該当すること間違いなしです。下宿をするだけ裕福でもなく、通学を条件に南山大学に入学したのです。9時の始業時間に間に合わせるためにいつも6時30分には家を出て、100m高さの丘を越え駅まで未舗装の田舎の山道を徒歩で15分、雨の日には靴はどろどろになり、雪道では滑って転んでやっと駅、三重交通湯の山線に乗り15分、近鉄四日市駅で満員電車で押し込まれ、急行に乗って40分、名古屋駅では市電に乗り換え35分、杖中から徒歩で5分やっと教室に到着の毎日でした。もちろん帰宅も授業終了後、真っ直ぐ帰って7時30分の帰宅であった。

母は何も言わず私より先に起き朝食を食べさせ、

私を送り出してくれた。今となって感謝していません。

途中伊勢湾台風があり、通学が不可能となり、親戚の家に5ヶ月間お世話になりました。その後、大学のお世話になり、学校近くの修道院カテキスタに下宿させて頂きました。伊勢湾台風のお蔭で我が家以外の家庭を垣間見ることも出来、三重県から通ってた先輩との集団生活も経験し、いい体験をさせて頂きました。良き先輩ばかりでいろいろなことを教えて頂きました。

やっと、近鉄線が完全複線化になって開通してくれ、通学時間も大幅に短縮することが出来片道2時間弱の通学時間となりました。通学には大変な時間を費やしましたが、その間は読書の時間であり、勉強の時間であり、先輩後輩とのコミュニケーションの場であり、睡眠の時間であり、社会の変化を観察する時間であり、彼女を探す時間でもあり、大変有意義な時間でした。

長時間の通学も一学年の時には、電車に乗るのも下手でぎゅうぎゅう詰めの一番辛いところに押しやられていました。年を重ねるごとに上手く乗車出来るようになり、日々の努力により途中下車される方の座席の所まで入って行き、座って通学するテクニックも修得しました。

私が3年生になったときに、電車知った多くの三重県人を集め三重県人会三重県支部を作り、喫茶店を借り切ったり、すし屋でコンパを開いたりして交流と親睦を図ったこともありました。

そのようにして通った大学で引っ込み思案の私が習得したことは井上紫電教授の民法ゼミを通じて人前で自分の考えていることを相手に少しは理解していただけるように話すことができるようになったことです。そのことは今でも大いに役立っています。

また、クラブ活動は通学時間の関係もあったが、9時から5時までの時間内に活動できる写真クラブに入部しました。各所で写真撮影会、展覧会、部室でのクラブ活動等楽しい思い出が一杯です。

夏休みには乗馬同好会に臨時入部して、森林公園で合宿した経験があります。飼葉を遣り、馬小屋で馬糞の片付けや敷き藁入れをして馬と一緒に過ごしました。そのようなことをして、やっと馬に乗せて

## 私と南山

大15期 仏文 井 上 亜 子

入学後一、二年間は、フワフワと地に足が着かず、甘たれて、迷う事ばかり。今この時が人生の中でどんなに短く、貴重な時であるかと云う自覚にも乏しく、自問自答の日々でした。そんな自分自身と向かい合う事の出来る場所として、大好きな南山教会で一人過ごす事も度々でした。今振り返ればそんな未熟だった日々も、私の人生の中で確かに必要な「時」として与えていただいていたのだと感謝と共に素直に思う事が出来るのです。

東京オリンピックの開催された年、三年生には新校舎に移り、南山恒例の語劇祭に、私も変わらなければとの思いから私にとってみれば一念発起して参加を決め、ギリシャ悲劇「アンティゴヌ」で故木村太郎先生の熱心な御指導の元、アンティゴヌを演じさせていただいた事は、大切な思い出となっています。今もアルバムでその時の舞台上での白黒写真を見ると、迷える子羊そのものだったその時代の自分の切実なる姿に出逢う気がして、懐かしさで一杯になります。

卒業して子育てもそろそろと云う30才代後半に、

いただきました。最初はお尻も痛いし恐々だったが、ちょっとした競技をすることも出来ました。

また、在学中にあれこれと経験した、アルバイトは社会人に成ってから大いに役に立ちました。

中学校でも高校でも大学でも勉強は大事だが、もっと仕事の実習が出来るような授業を取り入れ、将来の仕事選択の参考になるような事業所での実習、また働くことの喜びと、それに対する対価を頂く経験をさせたらと思う今日この頃です。

つれづれなるままにあれこれと書き、貴重な紙面を汚させて頂きました。あしからず。



仏文科の二年先輩からのお誘いで、退任することになられた故松浦一郎先生の宗教哲学の最終講義を幾度か聴講させていただく機会に恵まれ、本当に久しぶりに母校の門をくぐりました。それなりに人生を重ねてから受けた講義は、こんなにも豊かに心に沁み込むように理解することが出来るものなのかと感動し少し離れていた母校への気持ちが一步縮まったように思えたものです。

それまでも所属していた軟式テニスクラブのO・B会には、時々参加していましたが、50才代になり三重県人会の集いにも毎年のように出席させていただくようになりました。小林さん、梶さんと云う大先輩達がお元気な姿を見せて下さるだけでうれしく、又「南山大学同窓会」と云う連がりだけのご縁で、先輩後輩の方々に大変お世話になり、数多くのご無理も申し上げてきました。この年齢にもなると失礼も無礼も言いたい放題、先輩風まで吹かせて態度も大きくなり、それでも親しく県人会のお仲間の一人に加えていただいている事に、年ごとに感謝の気持ちを深めている今日この頃です。

## CHANGEと南山

大15期 英文 稲垣 富有子

南山大学同窓会三重支部50周年まことにおめでとうございます。50才以上の会員の方々は月日の経つ早さに驚かれ、半世紀という時の重さを実感されることでしょう。若い会員の人達も3、40年後には同じ感慨を持たれることでしょう。三重支部が誕生するのは私が中学生の時ですが、私自身が歩いて来た時代は大きな変化が続く時代でした。私の生まれた翌年には太平洋戦争が終結し、日本は新しい国家へと歩み始めます。男女平等が唱えられ、民主国家に生まれ変わったものの、4年制大学へ進学する女性の数も限られていました。四日市には語学教室というものは皆無でしたし、入学した枳中の大学までは名駅から市電が走っていました。その後思いもかけなかった大学の移転とそれに伴う新設の外国語学部への転部という大きな変化に遭遇します。山里町の現大学はさといも畑の隣、キャンパスの木々はまだ幼く、名古屋の市街がどこからも見下ろせる状態でした。荘重なピオ館近くの旧大学での2年間、そして何もかも新しく美しかった後半の2年間は教育の真髄や伝統は固く守られていましたが、全く対照的

な雰囲気の中にあったことを記憶しています。

「人間の尊厳」を掲げる大学での教育はたった4年ながら、その後40年余り私の生き方を支え続けるbackboneとなりました。大学での教育は学生の持つ力を引き出し、伸ばすという観点から時には大変きびしく、しかし更に学びたい者には慈愛にあふれた指導が受けられました。ある時ドイツ人神父の先生から女生徒の私達に「暑いので上着をとってもよろしいか？」と尋ねられ、対等の大人の人間として扱われたことに感銘を受けました。卒業後、2年間教職につき結婚、営業マンの夫の転勤に伴い、子ども2人を連れ、13回の転居という変化の連続でしたが、見知らぬ地で立ち往生する度にいつでも原点の南山を思い出し、ここまで来ることができました。50周年の今始まった政権交代という大きな変革の中でも残ってほしいもの—それは私が南山大学で受けた「人間の尊厳」を謳う教育です。

## 「私と南山」

大15期 教育 牛田 敏雄

高校生の頃鈴鹿市にあるカトリック教会に公教要理と英会話をギルマーティン神父に習いに行ったのが、南山との関わりを持つきっかけでした。そこで神父より南山大学をすすめられ受験することにした。当時通学は近鉄で名古屋駅まで1時間、名古屋駅から枳中まで市電で約一時間の往復4時間以上かかりました。二年次終了までは枳中の校舎、三年次から現在の山里町の新校舎で学びました。通学時間の解消のため途中からカテキスタ修道院を下宿代わりにしたり、三、四年生の時は南山高校女子部で宿直員をしながらの学生生活でしたので、かなり時間的、経済的にもゆとりが出てきました。東京オリンピック組織委員会の通訳などかなり稼がせてもらったものの丁度試験と重なりすべてレポートに代えてもらい、戻ってから大変だったことを思い出します。当時の先生方は鷹揚で人情味があり、ゼミなども度々教授宅で遅くまで議論し夕食まで御馳走になり奥様はじめご家庭にもお世話になりました。この

ようなごんまりしたぬくもりのあるところで勉学できたのがなつかしく思い出されます。38年間の教師生活を終えてからは今でも読み残した本を少しずつ読み返しています。今年九月に伊勢市で開催される第29回世界新体操選手権大会の通訳に行くことになっています。これも南山で培われた国際交流精神のおかげだと思っています。他にも2005年の愛・地球博や西山先生を中心とする伊勢英語センターにも参加させてもらっている。三重支部総会も50年を迎えようやく100人以上の参加があり、益々地域及び大学発展のために寄与できるよう努力していきたい。その第一歩として、南山小学校の見守り隊の一員として現在がんばっています。

今年のHCデイは三重からもバスを仕立てて久しぶりに発展した大学を見るのも楽しみにしております。

## 「新旧学舎」通学考

大15期 英米 松岡 珠恵

私が南山大学へ入学したのは、昭和37年、枳中に大学があった時です。一、二年生時は枳中。三、四年生時は山里町の学舎、と新旧両方で学生生活を送ることが出来、今から思いますと貴重な経験であったように思います。追分の自宅から枳中へは二時間かかりましたので（名古屋駅より市電）、一年生の時は、通学と授業で殆どの時間を費やしていたように思います。二年生は授業時間が少し減った分、余裕ができました。そのような生活に慣れたと思っていましたら、大学が山里町へ移ることになり、また通学方法を考えねばならないことになりました。最初は、友人と本山から名大行きバスに乗り、名大前より八雲町の小高い坂道（雨の日はドロドロ）を歩き、大学の裏門から入って、ということもありま

した。そのうち、友人は名駅より八事日赤までバスというルート。私はバスに弱いが、名駅より池下まで地下鉄、池下から八事日赤までバスというルートに落ち着きました。その枳中も八事日赤も今では名駅より地下鉄を利用して短時間で行く事が出来、隔世の感が致します。2007年11月3日に南山で同期会があり出席致しましたが、その折、八事日赤辺りのあまりの変わりようにびっくりしました。昔は病院だけで何も無かったのにと……。大学もキャンパスがとても大きくなり、複雑で迷ってしまいそうでした。私達は、枳中、山里町、両方の大学に思い出がありますが、ペギー葉山の“学生時代”を聞いていますと、私は枳中の方の南山時代を思い出します。皆様はいかがですか。

## 南山と私

大16期 経済 坂 寄 洵 子

「大人への階段は一段づつゆっくりと進め……大人子供になるな……」47年前、南山に入学が決まったとき父親から言われた言葉です。その時は「んっ、おとなこども……何それ？」でしたが……。大学生活が始まると、新入生歓迎会、コンパ……と続き、初めてお酒を口にしたのもこの時でした。ついこの間までは普通の高校生ですから、環境の違いに、父の言葉など何処へやら、見るもの聞くもの全てが……ワァーッ大人っ！……の状況でした。

所属したクラブがまた、新聞会でした。枳中の校舎前にあったプレハブの部室では、先輩達が激しい口論を繰り広げ「自治だ、改革だ、ノンポリだ、民青だ」と、それまで耳にしたことのない言葉が飛び交っていました。この前後数年間は、安保闘争、東大紛争と学生運動が頂点だった時代です。大学の新聞会としては当然の状況でしたが、デモや集会のことなど何もわからず、こうした先輩達を、すごい大人なんだ、カッコイイナァなーんて憧れていたのです。そんな私にやらせてもらったのは、翌年に完成予定だった山里町新キャンパスの工事状況の取材とか、新聞会主催の講演会講師へのインタビュー記事ぐらいでした。今でも、土が剥き出しのところ

かべることができます。また、名駅で講師（この年は務台理作氏）を出迎え、大学までの30分近い車中、ドキドキしながらやったインタビューの緊張感……新聞会にいたからこそその体験でした。

新設された経営学科を含め経済学部380名余のうち女子学生は7名だけで、授業によっては当然一人だけのこともありました。名前と顔をすぐに覚えてもらったものの、毎回あてられ質問されて恥をかいた回数は数え切れません。

学食のテーブルを囲んで、また「スワン」ではあのホットドッグを食べながら、この7人でよく楽しいお喋りをしたものです。時には「墮胎は是か非か？」などと、随分と背伸びをした話をしたりもしました。完全に大人子供していた時期です。

半世紀近くの時を経て、今、改めて振り返ってみると、南山一年生の頃のこうした体験の全てが、確かに、私にとっての「大人への階段」の最初の一段目と言えます。



今、私の人生は4分の3を過ぎた頃だろうと自分では思っています。この4分の3の歩みを振り返った時、自分の人生が、たくさんの出会いによって彩られてきたことを思います。様々な出会いのそのつど、右へ左へ、前へ後ろへと想いが揺れたり変化したりしながら、また、その時々自分のあり様を肯定したり否定したりして、「今」の自分があるのだと、改めて納得させられます。

私が南山大学と出遭うことになったきっかけの一つには、中学・高校時代の恩師、H先生が、その当時、南山の大学院に在籍中だったこともあります。入学後も先生にはいろんな体験をさせてもらいました。ある日のこと、先生と一緒に講義室で沼沢喜市学長先生の講義を聴講させてもらい（内容は難し過ぎて理解できないのは当然のこと）、講義終了後個人的に話し掛けていただきました。入学間もない頃に、学長先生に直接話し掛けられる機会に恵まれたのです。入学理由を尋ねられ、それに答えた後で、「この大学は全国的には小さいけれど、文化人類学の分野では、世界的にも注目されている存在なのだ。君もしっかり勉強し、自分のスタンスをしっかり確立出来るように頑張ってください。」と激励して頂きました。18歳の、目的も自覚もあまりしっかりしていなかった自分にとって、この出会いは大きな感動でした。以来、今でも学長先生のこのときの言葉を大事に思って生活してきたつもりです。

また、同じ大学1年次の頃、南山にライシャワー博士夫妻が来訪し、講堂で講演をされたことがありました。私は講堂の中程中央通路側の席に座り、博士のお話を聞いていました。その時の話の内容は今では全く思い出せないのですが、講演が終わり、中央通路を歩いて帰られる時に、私は何を思ったのか、突然その場で立ち上がり、握手を求めて、手を差し出しました。すると博士は、立ち止まり、大きな、柔らかい、暖かい手で、優しい眼差しを向けて、私の手を握り締めて下さいました。それはほんの1分にも満たない時間でしたが、その時の嬉しさは今でも昨日の事のように憶えています。

南山での出会いの強烈な思い出として、このお二人の方が現在でも私の胸の中に生き続けています。他人には何でもない事なのでしょうが、私にとっては宝物のような思い出として鮮明に残っているのです。他にも南山での多くの方々との出会いで、沢山の事を教えられ、学ばせてもらいました。私にとって南山大学は誇れる存在、自慢したい存在です。正に『人間の尊厳』を大事にした様々な出会いを提供してくれる存在です。これからも、まだまだ多くの素晴らしい出会いの機会を期待しつつ、充実した4分の1の時間を全うしたいと願っています。私の人生の指針として、南山が常に在るように切に願っています。

### 三重支部 設立50周年によせて

南山大学同窓会三重支部設立50周年誠におめでとうございます。先輩諸氏のたゆまぬご努力と、ほとぼしる情熱の賜物と感謝申し上げます。

50年という大きな節目を迎えるにあたり、三重支部の新たな飛躍を期するとき、私たちはこれまでの歴史を振り返り、そこから学ばなくてはなりません。

素晴らしい伝統を残しつつ、その上に立って新しい時代の要請に応えうる同窓会三重支部像を描き、新しい価値創造のための第一歩を踏み出さなければなりません。

いつの時代にも又、どのような組織にも世代間ギャップが存在し、それぞれの価値観の相違を乗り越

えることの難しさを痛切に感じざるをえません。それを解決するには会員自らが同窓会三重支部総会などの諸行事に積極的に参加して忌憚のない意見を述べていただき、それを可能な限り反映させることだと思います。

我々三重支部同窓会会員は「同窓会が自分たちに何をしてくれるのか」ではなく「自分たちが同窓会に何ができるのか」を一人ひとりが考え続ける必要があるのではないのでしょうか。そうすればおのずとポスト50年の展望が開けるものと確信いたします。

最後に南山大学同窓会 三重支部のますますの発展を心より祈念申し上げます。

### 三重支部50周年に寄せて

南山大学同窓会三重支部設立50周年を心からお祝い申し上げます。南山大学の卒業生として、在学時代や社会生活、同窓会活動に微力ながら携わっていた頃の思い出を述べさせていただきます。

私は昭和39年いわゆる1964年入学生です。丁度この年は山里町の現在の校舎が新たに完成し4月から私たちはピッカピカの校舎で勉学を始めました。建物は大学本部棟、研究棟、E.F.G.Hの教室棟、図書館、学生会館（食堂）だけで、他に野球場（現在はパハスクエア）、陸上競技場、テニスコートだけだったと記憶しています。入学試験と入学式、オリエンテーションを受けたのは旧校舎でした。交通の便は当時、地下鉄は東山線だけ、市バスと市電のどれかに乗って名古屋駅から通いました。今に比べると随分時間がかかりました。南山大学は語学、特に英語では有名な大学でありましたので私も英語を専攻しようと思っていましたが結局経済学を選びました。立派な先生方に恵まれ、学んだ知識は私の人生において掛け替えの無いものとなっています。大学でのクラブ活動では男声合唱団メイルクワイヤーに所属し、4年間楽しい学生生活を見出しました。いい友達、仲間めぐり合い、現在でも同期生で集まり楽しんでいます。また最近OBで結成している南山ゴールデンメイルクワイヤーに参加して歌っています。

卒業して、ある建材メーカーに就職をしましたが1年だけで、父親が経営していた鉄工所に入ることになりました。小さな会社でしたが技術を担当するようにとの父の願いで、大学で学んだものを直接的には生かせなかつたのですが、新たに機械工学の勉強を始め、現場で実務を行ないながら、支障のない程度の技術を習得しました。

24歳で結婚をし、3人の子供を育てました。その子供達も全員独立していますので、現在は家内と愛犬（クリちゃん）との生活を楽んでいます。

同窓会との関わりは、幹事の方（クラブの先輩）から同窓会三重支部の活動を手伝うようにと依頼がありまして、多分1972年頃から1998年頃までお手伝いさせていただいたと思います。50年という長きにわたり、毎年欠かさず支部総会を開催して下さっている三重支部の役員の方々に心から御礼申し上げます。私も初代支部長の小林安夫様をはじめ、役員の方々の指導のもとでお手伝いさせていただく機会に恵まれたことに感謝しています。今後私自身、少しでも社会に貢献できますように努力したいと思っています。

またこれからも南山大学同窓会三重支部がますます発展することを願い、お祝いの言葉といたします。



南山大学同窓会三重支部50周年記念のバスツアー参加者  
瀬戸キャンパスにて



## 私と南山

大18期 経済 一見知行

ふと、あの感激を思い出す。

私の部屋に唯一掲げてある賞状がある。「百米平泳優勝 第7回愛知六大学水上競技大会に於いて頭書の成績を取められたので之を賞します 昭和41年8月28日」と記載されている。

1965年に経済学部経済学科に入学。津高校在学中は水泳部に所属していた。大学で他のクラブも考えたが水泳部に入部した。

大学は山里キャンパスに移転していたが、プールはなかった。3年間自前のプールはなく間借り状態であった。名大プール、愛知県体育館室内プール、南山高校プール等様々な場所で練習をしていた。そのような状況下大学1年の夏シーズンを終え、ある程度部活動に馴れた頃、20才の節目を前にして2年目の目標を考えていた。「10代の証を残したい」そんな想いから「自身でできる最高の練習を実行する決意を固めた」

目標として、上南戦で上南記録を出すこと。シーズン最後の愛知六大学戦で百米平泳優勝と決めた。シーズン前の秋・冬トレーニングから目標に向け全力をかける毎日であった。水泳部の合宿では「50m×100本 100m×20本 400m×10本、その他短距離ダッシュ等」1日延べ12000m以上になった。練習が終わるとしばらくは動けなかった。トレーニ

ングの結果、自己記録更新となった。

大学2年になり水泳シーズンが始まった。1966年（昭和41年）6月18日・19日上南戦が開催された。当時の南山大学新聞によると第7回上南戦各部全体の総合成績は10勝10敗1分け、引き分けとなった。水泳部は南山の勝利、私個人は百、二百平泳上南記録で一位となった。

その後も最終目標に向けがむしゃらに練習を続けた。8月28日、愛知六大学が愛知教育大学岡崎キャンパスプールで開催された。私は百米平泳決勝に出場。持てる力を最大限に発揮し懸命に泳いだ。おかげさまで僅差であったが大会記録で優勝できた。毎日新聞によると愛知教育大6度目の優勝と記載されている。因みに第1回は南山大優勝と先輩より聞いている。私にとって悲願の優勝となった。

1. 優勝することの大変さを知った。
2. 努力、気力は不可欠である。
3. 意志有るところ道は開ける。

優勝して感じたことである。

学部・ゼミでの勉強と水泳部での活動は私の心の原点となっている。

卒業後、銀行に勤務「しっかりやれよ」と自分に言い聞かせながら40年以上の歳月が流れた。当時の出来事は今でも懐かしく思い出します。

## 私と南山大学

大21期 経済 伊藤 準一

私はこれまでの人生において自分と南山大学との関わりは何であったのかと今回初めて自分に問うてみた。その答えであるが私は大学から2つの恩を受けたのではないと思う。

一つは「私の健康を築いてくれた恩」、もう一つは「第三銀行への入行を決意させてくれた恩」である。

一つ目の「恩」については、銀行に勤務して約38年になるがその間入院するような病気や怪我をしたことがなく、また人間ドック検診で要精密検査と診断されたことも無い。私は幼少時代から大変病弱であったので大学は自分の体を鍛える最後の機会と考えゴルフ部に入部した。そこでは毎日持久力や筋力アップなどのきついトレーニングが続いたが、同期の部員の暖かい友情や先輩達の励ましに助けられたおかげで他の部員について行く

ことができ、なんとか人並みの体力を築くことが出来た。このクラブで体を鍛えることができたことが今の健全な身体を造り、そして社会へ出てからの活躍に繋がったと思っている。残念なことに在学中に諸事情があってゴルフ部の一員として最後まで過ごせなかったが、ゴルフ部でのクラブ活動が私の健康の源になった「恩」はいつまでも忘れない。

もう一つの「恩」については、就職先の選定時において当時の就職課のある課員の何気ない一言がきっかけで、既に内定していた他の銀行を辞退し第三銀行を選んだことである。そのことが結果的に私に適した職場であったことから一度も辞めたいという気持ちを持ったことも無く今日まで常に前向きに仕事を続けることができ、今ある地位につけた「恩」である。その一言とは、「内定先

の銀行は先輩が多く何かと有利かもしれないが、先輩のいない方がしがらみも無く実力が発揮でき面白いかもしれないね。」という趣旨の言葉であった。私はこの言葉を聞いて、あえて先輩のいない銀行に行って自由に自分の実力を試してみようと考え、内定先を辞退し第三銀行を選んだ。この一言が無ければ私は友人と一緒に先輩の多くいる銀行に間違いなく行っていたと思うし、そうであれば頭取という重職にも就いていなかったであろう

## 四日市市役所「山里会」

第23期 経済 田代和典

四日市市役所には南山大学出身者で構成する「山里会」がある。山里会とは言うまでもなく名古屋キャンパスの所在地からとったネーミングである。平成21年度現在で67名（現役45名、OB22名）となっており、私と一緒に四日市市役所へ就職した南山大学出身の同期が5名いる。当時は高度成長期の最終段階だったこともあり採用者が多かったことを記憶している。大変心強く思ったものである。山里会はその仲間とともに毎年、定年退職者の送別会を兼ねて総会を開催している。その私も既に36年目を迎えることあと2年で定年となり、送る立場から送られる立場になろうとしている。

一方、最近の市役所は不景気を反映してか暫くの間採用試験が無かったが、昨年度あたりからようやく事務職採用が復活しはじめている。団塊世代の多数の退職者の補充である。幸いにも我が大学からも再び後輩が入ってくるようになった。大変嬉しく思っている。2008年度は4名が採用されている。

山里会の活動や三重支部同窓会の活動から思うの



平成12年度南山大学同窓会三重支部総会 平成12年5月27日出 於：四日市シティホテル

## 『私と南山』

大24期 経済 鎌倉 肇雄

袖すり合うも他生の縁、独活が刺身の妻になる、なんて言われるようにご縁といますか、出会いといますか、何時・何処で・何が起こるなんて予想だにしないことがあると思うわけですが、そんなことで私の学生生活が1971年4月スタートした。

学部は経済学部で決まっていたが、次に決めるのがクラブ活動であった。中高時代は卓球で培った俊敏性、得意な長距離走で鍛えた持続性で体力には自信があった。クラブ勧誘のデモを見て空手や少林寺拳法部の勇壮な姿に憧れたが、和服姿のお兄さんの巧みな話術に誘われて、行った先が落語研究会の部屋だった。ここから出会いが始まった。

落研では渉外を担当していた関係で交際範囲が広く、他の大学・放送局・演劇グループなど、落語だけにとどまらず、学生だけの劇団を立ち上げ、ミュージカルを公演したこともあった。

そして自らタレント養成学校に入学し、演劇・歌・舞踊などを総合的に勉強したものである。自身

の演技を通じて、お客様に笑いや感動として伝わることで、遣り甲斐というか達成感を感じる喜びを知った。活動エリアが大きく広がったのである。

もう一つは、加藤良三先生との出会いである。酒が飲める者集まれ！というゼミ生募集の声に賛同し、3・4年次の2年間お世話になった。ゼミ合宿では猛烈に勉強もした。酒を飲み語り合い、麻雀にも狂ったものだ。ある日、先生と仲間と今池に飲みに行った際、多額の飲み代を先生が小切手で支払ってくれたのは懐かしい思い出である。ゼミでは手形・小切手法、商法、会社法を研究していたが、実際の小切手の使い方を、実演を通じて勉強できたのに感激したものだ。

私はサラリーマン生活で9回の転勤を重ね、現在10度目の職場で会社経営に携わっている。今も多くの異業種の方々との交流を通じて、新たな出会いを楽しんでいる。縁は異なるものあじなもの。南山は、私にとって出会いの喜びを教えてくれた懐かしい学び舎である。

## 南山と私

大24期 経済 浅井 清司

私が南山とご縁ができたのは昭和40年に南山中学に入学したときからです。以来、大学を卒業する昭和50年までの10年間を南山学園で過ごしました。中高6年間は生徒会議長や文化祭実行委員長、新聞部キャプテンなどをやり、大学6年間は茶道部キャプテンや愛知学生茶道連盟議長などをやり大いに青春を謳歌しました。南山はまさに青春そのものですし、社会人になって地域の子供会や町内会の活動、JC、ロータリーなどのボランティア活動に参加したのも南山で受けた教育や課外活動などの原体験がおおいに影響していると思います。また自宅が近かったこともあり中高大の10年間徒歩で通いますが、通学途中、当時の学長沼沢喜市神父様、経営学部長の戸田正志先生とご一緒することもあり、いろいろお話ししながら通ったことも懐かしく思い返されます。また大学4年間ゼミでお世話になりました井上紫電先生には公私共に大変お世話になり、毎年年末にはご自宅へかがって庭掃除のお手伝いをさせていただいたのも楽しい思い出です。私が在学していたころは学生数も少なく先生がたも面倒見がいい方々

ばかりで学生と先生の間も密度の濃い交流があったと思います。当時の南山は、まさに井上ひさしさんの「モッキンボット氏」に描かれているようなカトリック大学ののんびりゆったりした時間が流れていたように思います。偏差値教育の弊害からもっとも遠いところに位置する学校、人間の尊厳のための教育をする学校が当時の南山であったと思います。マスプロ化、グローバル化する今日の大学にあって、こうした南山らしさ南山精神をこれからも大事にしていきたいと願います。60歳近くなりましても南山で過ごした10年は昨日のこのように懐かしくもまたいとおしく思い返されます。



## 出会い

大25期 英文 金森 伸郎

卒業してから三十四年経ち、今年は五十七才を迎える。在学中は英語学英文学科に在籍。今は陶芸の仕事に携わっている。高い授業料を負担してくれた両親には申し訳ない気が今だにしている。

学生時代に興味があった事、日本、ヨーロッパの絵画、工芸、彫刻。そして、日本、アメリカ、ヨーロッパの児童文学。特にイギリスのファンタジーには強く惹かれた。トールキンやC・S・ルイスの作品には深くのめり込んだ。卒論はトールキン教授の「指輪物語」や「ホビットの冒険」を選び、その神話性や物語を創造する背景をテーマにしたと思う。とてもとても難解であったと記憶している。

あれから三十年後位経つが最近二人の作品群が次々と映画化され、いい大人なのにワクワクし、子ども三人を連れて観に行っただけのものだ。

今一番の楽しみは茶道。大徳寺瑞峯院にて月一回、表千家の先生の下で稽古を続け十四年程になる。

こちらの「瑞峯院」さんは臨済宗の小院。豊前豊後、今の大分県にあたるのだろうか、藩主大友宗麟公の菩提寺でもある。

大友公と言えば、今から約四百年以上前にイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエル師に帰依した

キリシタン大名。おそらく日本でも相当早い時期にキリスト教の教えに触れた大名と思われる。

おもしろい事に、この瑞峯院には石庭が造営され道教の理想郷「蓬莱山」が白い小石のうねりの中で非常に美しいお姿をしておられ、もう一方の庭にはなんと十字架に組み合わされた静かな空間が存在する。不思議にも卒業してからおよそ二十年後に出くわしたキリスト教であった。

学生時代に一気に引き寄せられる思いが、最近ずっと続いている。本当に有り難いと思う。両親、先生方、諸先輩方のおかげだとつくづく思う今日この頃です。



## 南山と美しき女性達と私

大27期 経営 鈴木 賢治

「まあ可愛らしい。」と言われたかどうか分かりませんが。私と南山との最初の出会いです。

幼稚園の頃だったでしょうか。当時南山大学生だった長兄に連れられて、いりなか校舎へ遊びに行きました。年の離れた弟を面白がり、友人達が寄って集って相手をしてくれました。きれいなお姉さん達だなあという記憶があります。

「美しい女の子ばかりだろう。」二度目の出会いは、高校の頃です。南山大学を卒業したばかりの次兄が、卒業アルバムを自慢げに見せびらかせました。

確かにきれいな女性がいっぱい写っています。志望校が南山に決まりました。

目標は決まったのですが、何度か受けた模擬試験は、「志望校を再検討せよ。」というものでした。ただ、志望動機が明確でしたので、受験勉強にも身が入り、天も味方してか、合格を果たしました。

志望校に落第し、滑り止めに入学した長兄、無理せず、楽々合格した次兄、なぜ合格できたのだと、周囲が訝った私。程度の差こそあれ、入ってしまえば皆同じです。予想に違わず、南山キャンパスは、夢のような楽園でした。その後5年間、美しい女性達と、学園生活を満喫しました。そして、中でも一番美しい人と恋に落ちました。今の妻です。

「そんな夢のようなことがあり得るのか。」と、穿ったものの見方をされる読者の皆さん。疑う事なかれ。過去の記憶を美しく塗り替えるのが、私の特技なのです。

つかみ合いの喧嘩をした友人達も、今は素敵な仲間です。つらい失恋も、成長の糧です。思い出したくない経験は、忘れちゃえばいいのです。それが今の私の幸せの秘訣です。それでは、皆様ご機嫌よう。

## 私と南山大学について

大29期 英米 東 洋子

およそ5年前のことでした。ちょうど息子が大学受験の結果が分かった3月前半のことです。私が“あんたさ～三重大学工学部、立命館大学理工学部を受かったのに何で南山の数学科は補欠合格なん？”って聞くと、息子が、“だってお母さんは南山大学大好き人間だろ。もし受かったら強制的に行けといいそうだったから手を抜いたんだよ。それに僕は男だから南山よりもどこでもいいから国立に行きたかったんだ。南山って女性はカッコいいけど、どうもイメージが男にはピンとこない。”

これを聞いて一理あると思ってしまいました。私が当時あこがれの南山大学に入って最初に思ったのは女子学生の華やかさに比べ、男子学生は地味だったからです。国立に落ちて入ったという男子学生が多かった反面、女子学生は第一希望で入った学生が多かったように思います。そういうわけかとても居心地はよかったです。女性が優位だったからでしょうか？大学に居心地のいい居場所みたいなものを見つけ、毎日がとても充実していました。勉強は適当にしかしていなかったのが今では悔やむところで、今だったらもっと熱意をもって授業を聞けると思います。

大学では体育会の卓球部にはいって上南戦にも

参加していい思いでもできましたし、私の今でも続けているスキーもこの時代にクラブで毎年冬に行っていたときに覚えました。クラブ中心の生活でしたが、その中で先輩後輩の礼儀も覚え、今でもお付き合いが続いている先輩後輩たちに恵まれたので一生の宝だったと思っています。いろいろ思い出はありますが、この4年間の生活は今でもダイヤモンドのような輝きを私の中で放っています。

三重支部の会の参加は2年前からでした。たまたまインターネットで知り合った方が幹部をなさっていたことがきっかけで、土曜日に参加できない私のために、日曜に変更してくださったのです。それまで全く知らなかった方と、インターネットを通じてお知り合いになり、またこのような三重支部にも参加できるようになったのも、私が南山大学大好き人間で南山という共通点をととても大切に思っている結果だと思っています。

私にとって南山は単なる出身大学というだけでなく、自分の中で誇りに思い、いつまでも輝いている太陽のような存在といっても過言ではありません。そしてその4年間の南山での生活が今の私の生活の基礎となり今の私を光らせている大きな要因になっていると思っています。

## 私と南山

大30期 経営 伊藤 好人

三重支部設立50周年記念文集への寄稿にあたって、改めて自分と南山との関わりを思い返してみました。

在学中は4年間剣道部に在籍し、授業に出なくても部活動には出席するというような学生生活で、学生時代の思い出といえばほとんどが剣道部を通じてのものばかりです。普段の稽古に試合、年3回の合宿、上南戦、コンパ、テレビ番組出演（「ラブラブダッシュ」というローカル番組に剣道部の5名で出演）など、良い仲間と先輩、後輩に恵まれ非常に充実した学生生活を送ることができたと思います。（授業に関わる思い出といえば4年生の時に行ったゼミ合宿くらいでしょうか。）

就職してからも南山出身の会社の先輩や後輩と三重支部の活動を通じて交流があり、しかも入社当時は南山出身者は数えるほどだったのですが、今では現役だけで100人を超えており、まだまだ増加しそうな勢いで非常に嬉しく思っています。また、先輩に誘われて三

重支部の活動をお手伝いするうちに三重県内のいろんな南山出身の方々とも交流することができ、今もそれが続いていることは非常に有難いことです。

仕事で15年ほど前に名古屋に赴任したとき、南山出身の会社の上司に誘われて「南山経済人クラブ」にもお世話になり、以来たくさんの方々との出会いと交流があって、同時に南山大学出身者の幅広い分野での活躍を実感しています。

自分の家族にしても、家内は南山短大出身で剣道部の後輩、家内の妹も南山の英米科を卒業、長男も昨年南山の経営学科を卒業して今は社会人となっています。

振り返ってみますと、自分にとってもまた家族にとっても南山とはきってもきれない深い縁を感じるとともに、これからも南山大学OBであることに誇りを持って生きていきたいと思っています。

## 三重支部創立五十周年によせて

大31期 法律 水谷 順子

南山大学同窓会三重支部創立五十周年、おめでとうございます。

私は大学卒業後、就職・結婚・出産・育児と人並みな生活を送ってまいりました。一人娘が四歳になった年に届いた三重支部総会の案内状。それまで参加をしたことがありませんでしたが、家庭に納まっていた時で、大学時代がふと懐かしくなりました。当時の三重支部長であられた小林初代支部長に、子ども同伴の可否についてお尋ねしてみましたところ「どうぞ、どうぞ」と、快いご返事をいただきました。」その寛容なおひとは、やがて私たち母娘にとって南山が“熱い存在”になっていききっかけとなったのでございます。

初めての同窓会、懇親会の中では一人ずつマイクが回り自己紹介。近況報告に加え、子連れでの参加に許可を得られたことへの感謝の弁を述べました。その時、司会をされていた加藤先生の「小さな子はどんな場も和ませてくれる不思議な力を持っていますね。」それは、恐縮していた私の緊張を一瞬に解してくださる温かいお言葉でした。

アットホームな雰囲気居心地の良さを感じ、それから毎年参加、武藤顧問が第二代支部長でいらっしゃる時から幹事をさせていただくようになりました。

幹事をお受けしてからは、三重支部運営のお手伝い、本部行事への出席、他支部との交流、HPの作成、SNSコミュニティ管理…と、私のプライベート

トは同窓会活動のおかげで一層充実したものとなりました。

マルクス元学長に「大きくなったら南山へいらっしやい」と優しく頭を撫でていただいたのが今から十五年前、娘が六歳のときでした。その翌年には、講演に来てくださった安田文吉先生と2ショット撮影。高校は、坂寄現支部長が校長先生…と、娘は幼い頃から何かのエニシに導かれるように成長し、現在（2009.12）南山大学四年生、“安田文吉ゼミ”でお世話になっています。私もまた“父母の会”などで懐かしいキャンパスに足を運ぶ機会を得られ、構内でカルマノ学長にお会いすると「あ、三重支部の」と素敵なスマイルで声をかけていただくようになりました。

南山大学同窓会三重支部は昭和三十四年、まさに私が生まれた年に発足しました。そして五十周年を迎える記念すべき年に娘が南山大学を卒業して新会員に。

母になって二十二年、「いつか娘を南山に」の夢は叶えることができました。多くの方々のお力とご縁に感謝し、これから一緒に同窓会に参加できる幸せを母娘で噛み締めてまいりたいと思います。

南山大学同窓会三重支部の礎を築いてこられた先輩方への感謝と、進取の精神溢れる若い後輩諸君への期待をこめて、会のますますの発展を祈念し、三重支部創立五十周年のお祝いの言葉とさせていただきます。



平成8年度 南山大学三重支部総会 四日市シティホテルにて H8.7.6

## 「私と南山」

大31期 国文 国友 真弓

私が初めて三重支部の総会に出席させていただいたのは、平成8年のことです。同期の水谷さんと一緒にそれも子どもを連れての参加でした。「来年も子どもを連れて参加しようね!」と言葉を交わし、水谷さんと再開するのが楽しみで、この時はまさか自分が幹事となるなんて夢にも思っていませんでした。

6月の年中行事の様に参加させていただいているうちに、だんだんと顔見知りの方も増え、初めはちょっと話しくいと思っていた、先輩の方々ともお話が弾むようになり、いつの間にか参加者名簿も真ん中辺りになって来ました。

同窓会本部の総会にも出席させていただき、きっと幹事になっていなかったら二度と行くことがなかった大学にも度々足を運ぶようになりました。

大学時代はあんまり学校に行かずにサボってばかりで、学園祭も一度も行ったことがありませんでしたが、ホームカミングデイに懐かしい山里キャンパスを訪れ、20数年前と変わらない建物、教室の部屋に座

ると学生時代の楽しかった思い出が走馬灯のように甦りました。また東京支部の総会にも参加させていただき、同窓生の輪を広げることができました。

もし15年前の同窓会に出席しなければ 南山大学の同窓生であるということさえ忘れていたかもしれせん。私はこれからも一人でも多くの同窓生の方との輪を広げて行きたいと思います。



同窓会本部の総会にて

## 南山大学同窓会三重支部創立50周年にあたって

大32期 英米 岡田 浩明

南山大学同窓会三重支部が創立されて今年で50年を迎えましたが、幹事の一人として支部の仕事に関わるようになり早くも10年余が経ちました。私が初めて支部総会に参加したのは今から20年ほど前になりますが、私の高校の恩師である前支部長武藤武先生が声をかけていただいたのがきっかけでした。当時のことを振り返ってみると、総会の会場には大先輩ばかりで、まだ20代であった私は参加者名簿の一番下のほうで、行き場もなく何か場違いな所に来てしまったと戸惑っておりました。それがいつの間にか総会を主催する立場になるとは全く想像も付きませんでした。

幹事の一人として他の幹事の方々と知恵を出し合いながら、どのようにすれば一人でも多くの同窓生の方に総会に来ていただけるか、どのようにしたら楽しんでいただけるかを考えてばかりいました。これまで、参加者全員による近況報告を含めた自己紹介、円形テーブルでの参加者同士の語り合い、大学の先生を招いての講演会、懇親会の前のアトラクションとして現役学生のチアリーダー、落研、吹奏楽団の演奏等々それぞれの企画にはそれぞれ思い出があります。しかし、何といても最も印象深いのは、

ホームカミングデーに合わせて企画した“バスツアー”です。平成21年11月3日、冬を思わせるような冷たい風が吹くなか、バスは瀬戸キャンパスを訪れたあと山里キャンパスへ向かいました。当日は学園祭で、メイン会場のグリーンエリアではさまざまなイベントが行われ模擬店もたくさん出てとても賑やかで盛り上がっていました。その時ふと自分の学生時代を思い出してみました。なんと卒業して26年も過ぎているではありませんか!!しかし、今自分の目に映る建物、芝生、噴水…すべての光景は当時そのまま、それほど時間が過ぎていることを全く感じることもなく、一人密かに昔の思い出に浸っておりました。帰りの時間の都合でキャンパスの外に出ることはできませんでしたが、講義を抜け出してよく通った喫茶店、お昼をよく食べに行ったカレー屋さん、何か面白いものがあるのではないかと訪ねた古本屋などが今どうなっているかを確かめに行くことはできませんでしたが、また改めて時間を見つけて今度は一人で「いりなか」から歩いて26年という時間をゆっくりゆっくり遡りながら我が母校“NANZAN”を訪れたいと思います。

## 「私と南山」

大33期 経済 林 幹人

大学祭を訪ねる機会に恵まれた。皆でたむろしていた学食も既に無く、心の拠り所となるはずのサークルは解散済。居場所を探せないまま、何となく裏門から外に出た。街並みこそ変わっていたが、部活で走った坂道は健在。“さすがに閉店したかな?”と思いながら辿り着いた『珈琲ハウス あんくる』。

営業中・・・暫くしてから思い切って入ってみた。マスター夫婦も、内装も、全て昔のまま。他には昔から常連らしい客が一人。遅めの昼食をとりながら、思い出を少しずつ手繰ってみた。ひととき過ごした後、会計をお願いしながら思わず“覚えてる?”と尋ねた途端、カウンターの奥からマスターが“やっぱりポッポちゃん(当時のあだ名)だ!ふっくらしたから人違いかと思って声掛けれなんだよ!”と昔のままの笑顔で話しかけてきた。“忘れるわけない!バイトしてたMちゃんの彼氏!それにしても太ったねえ・・・”と喜色満面。

マスターとママさんは、当時の切ない思い出話一杯聞かせてくれた。いつも私が座っていた席のこと、溢れるほどのMの回想談、当時常連だった学生達の話、そして私が妻を紹介するため連

れて来た日のこと。常連客も、いつからか、顔つきながら聞いていた。

そういえば、“銀行員のお嫁さんになりたい”というMの一言で就職活動をやり直したこと、川名駅隣の支店を通る毎に“この店の支店長になる!”と約束した日が蘇る。

気がつけば、あっという間に小一時間が過ぎていた。胸一杯になっていた。

振り返れば、進学・就職・結婚という人生の転機を語る時、いつも南山大学があった。

いつしか過ぎていた25年の歳月。そして果たせない約束が一つ。まるで親代わりのように世話を焼いてくれた二人に、これからは経過報告が欠かす気になった気がする。



## 「私と南山」

大38期 英米 上村 昌生

2009年9月のことである。南山大学からの郵便物が届いた。卒業後20年ということで38期生の同窓会が、名古屋キャンパスで11月3日のホームカミングデーの日に行なわれるということであった。卒業してからもう20年の歳月が流れていたのかと思うと、そのあまりの時の経過の速さに唖然となった。とても仲の良かった友人たちとは今でも連絡は取り合っているものの、ほどほどの仲の良さだった人たちとは、卒業以来ほとんど会う機会もなく今日を迎えてしまっている。そのような人たちと20年ぶりに会うチャンスだと思い、出席の返事を出そうとしたが仕事の予定が入っていて欠席の返事を出すことになってしまった。あとで仕事の方は何とか都合が付き、南山大学同窓会三重支部の幹事会のメンバーということもあり、同支部の50周年記念事業の一つである「南山大学キャンパス訪問バスツアー」で当日に大学を訪れることになった。しかしながら、38期生の同窓会に対して

は何やら気持ちも冷めてしまい、結局参加はしなかった。

それから数週間が過ぎた頃、大学時代にとても仲の良かった友人からハガキが届いた。その友人は11月3日の38期生の同窓会に参加していて、その時に来ていたメンバーで話が盛り上がり、今度は38期の英米科のメンバーで同窓会を兼ねた忘年会をやろうということになったと書いてあった。この会にはぜひ参加しようと思い、出席の返事を出した。12月26日の当日には、11人という少ないメンバーではあったが、名古屋の栄に集い、楽しいひとときを過ごすことができた。20年ぶりに会った人もいた。それぞれが様々な人生を送ってきていて確実に年を重ねているのだが、会ったとたんに一人一人が20年前の自分に戻って話に花が咲く。同級生とは不思議なものだ。そして今回の件では、母校・南山大学が繋ぐ縁というのはとても奥の深いものだと感じさせられたのでした。

## 南山大学同窓会三重支部50周年記念に寄せて

大43期 神学 森野真治

このたび南山大学同窓会三重支部が50周年を迎えられるとのこと。気がついてみれば、南山大学を卒業してから早くも15年が経過していることに、時の流れの速さを改めて感じられました。私は南山学園には中学・高校・大学と12年間もお世話になったわけなのですが、卒業後、故郷の上野市役所（現在は合併して伊賀市役所）に就職してからは回りに南山卒業生もほとんどいない中、三重県議会議員への当選をきっかけに三重支部に顔を出ささせていただくようになるまで、すっかり疎遠になってしまっていました。

さて、私が南山中学を受験するきっかけになったのは小学5年生の頃に将来の職業としてカトリック司祭を目指したことに始まりました。南山大学と山手通の間に神言神学院という建物があるのをご存知でしょうか？現在も司祭や修道士を目指している方や、大学で教えておられる司祭が住まいしているところなのですが、私もお世話になっておりました。最終的には大学の途中で司祭への道を断念して、故郷に戻って就職したわけですが、思春期から青春時代を南山学園で過ごさせていただきました。

田舎者の私にとっては、名古屋という都会で暮らした経験も貴重でしたが、カトリックの教えに根ざした南山学園という教育環境の中で育てていただいたことが、現在三重県議会議員として頑張らせていただけるようになった基礎体力となっていることは間違いありません。まだまだ議員として駆け出しで、各界でご活躍の諸先輩方の足元にも及びませんが、南山卒業生として恥ずかしくないような議員になれるよう日々努力をして行きたいと思っています。

最後に、これまで50年の間に三重支部をお支えいただいていた、すべての皆様方に感謝申し上げます。



## 南山大学

大48期 神学 樋口龍馬

この度、南山大学での4年間で振り返って記念誌に寄稿するに当たり何度も書いては消し書いては消し…

あの4年間で要約し、記念誌にふさわしく、且つ興味深い内容に仕上げる、というのは大変に難しいことだと今、痛感しております。

ですので、私といたしましては本当のところをまともなく回想し、それをなんとか文章にまとめる事に致しました。

私にとっての大学生活とは何であったか？改めて考えてみると「出会い」であったように思います。もちろん学生の本分も全うしましたが…

今ではライフワークになったといえる合気道との出会い。

亡くなって尚、師範と呼べる人との出会い。

私の奥さんとの出会い。

他者のために自己犠牲を払える友人との出会い。

4年間フランス語を我慢強く教えてくださった教

授との出会い。

卒業した後でも私の苦境を見かねて手を差し伸べてくださった顧問の教授との出会い。

(こうしてみると心やさしくも卒業させてくれた先生方、クラブ活動、恋愛しかありませんね。)

一見、南山大学とは関係のない話ばかりであるようにも思えますが、南山大学のあのなんとも大らかなキャンパスがこれらの出会いを私に与えてくれたのだと思います。

学長の講義中に寝てしまったことや泉先生に退室を申し渡されたこと、4年生なのに1年生とフランス語の講義を受けていたこと、全部ひっくるめて大学生活の良き思い出となっております。

南山大学がいつまでも多種多様な学生たちを大らかに育み、社会に伸びやかに送り出す、そんな学舎であることを卒業生として誇りに思います。

## 南山に入ってよかった！！

大47期 経営 山 瑤子

私は理系出身で国立大学を目指していたので、南山大学に入学することになったとき、正直言って大学で「何をしよう」とか「何がしたい」といった夢やビジョンがまったくありませんでした。失礼な話ですが、南山大学は希望校ではなく、仮面浪人のつもりだったのです。

そんなとき入学式で、マルクス学長の話の聞きました。「南山大学でいい友達をたくさん作りなさい」この言葉は、大学は勉強をするところだと思っていた私にとって、違和感があって、とてもひっかかる言葉でした。

学長の言葉を胸に、せっかくだから何かを探したいと思って、思い切って柔道部と美術部という2つの部活・サークルに所属しました。

それが私の大学生活をととてもすばらしいもの

にしました。どちらかというと集団生活が苦手だった私が、部活・サークルという集団で、先輩、後輩、よい友達と出会い、合宿や遠征、そして展覧会、飲み会みんなで一緒に楽しい経験をしました。

そして仮面浪人しようと思っていたことなんてすっかり忘れ、美術部では主幹も経験し、ちゃんと卒業しました。

仕事と家庭で精一杯の今から思うと、学生時代は時間が自由で、何も重荷がなくて、一番時間があるときでした。そんな時に、友達をつくり、友達から学ぶということを教えてくれてその場を提供してくれた南山大学での4年間は私にとってとてもかけがえのない4年間で、それ以降の人生にとってとても意味のあるものでした。

## 『私と南山』

大53期 英米 清水 裕美子

「南山＝とにかく宿題が多い」という方程式が私の中で成り立っています。大学生になってまで宿題というのがあるとは、思いもしていませんでした。毎日、リスニング、ディクテーション、グラマーの宿題が当たり前のように出されていきました。宿題を忘れて誰かのものを写させてもらうと、PoorやCopy workとなり、すぐにLLの先生に呼び出され、怒られました。その大量の宿題に加えて予習も必要で、予習をしていないときはAll Englishの授業についていけず、ただただ90分の授業を沈黙と苦痛で耐えなければなりません。このような状態から、「自由な大学生」というイメージは最初から壊され、往復4時間の通学、帰宅してからの宿題・予習の山に、身も心も疲れ果ててしまっていました。大学生にもなってどうしてこんなに拘束されなければならないのかと、自暴自棄になってしまっていたのですが、「遊びもコンパもしたい！！」という気持ちが、私にある解決策を見出させてくれました。それは往復4時間の有効活用だったのです。朝と帰りの電車の中で、ウォークマンを使ってリスニングをしたり、電子辞書を片手にグラマーや翻訳をしたりして、4時間でほぼ全ての宿題や予習をこなすようにしました。ほのぼのと走る北勢線は絶好の学習室だったのです。

そしてもうひとつ、南山の思い出として今も心に残り、今の私に大きく影響していることがあります。それは、1年生の初めのWork Shopの授業でさせられたことなのですが、英会話やリスニングではなく、グリーンエリアでのジャグリングだったのです。サーカス団でもあるまいし、なぜジャグリングなんてするのかと不思議に思っていたのですが、実はこれが、英語を話す上で一番大事なことだったのです。お手玉くらいならなんとかこなせる私たちも、ジャグリングはなかなか思うようにできません。失敗して失敗して、何度ボールを落としたことか。しかし、落とすことを恐れず、何度もしていくうちに、皆ができるようになったのです。そしてこのことが、英語にも通じることだと教わりました。3単のSなんてなくても、発音が悪くても、失敗を恐れず前へ前へと向かっていく姿勢があれば、英語は通じるのだということだったのです。もちろん、3単のSも発音も大事です。しかし、相手と意思疎通を図る上でもっとも大事なことは、体裁などを気にせず、失敗を恐れないということなのです。私は今、中高生に英語を教えています。毎年4月、私はこのジャグリングの話を生徒に伝えてから、授業を開始しています。

## 私と南山

院39期 経営 森 伸 生

私と南山大学との関わりは14年前（平成7年）にさかのぼる。当時、57歳であったが、社会人大学院制度を利用して南山大学大学院経営学研究科博士前期課程を受験した。

同研究科は社会人5名、一般学生（学部よりの推薦）5名、他大学からの進学者5名の計15名が定員枠であった。入学試験には沢山の社会人が受験していたが、幸運にも合格することができ、最年長の入学者となった。昼間は会社の経営者として小さいながらも数社のトップとしてビジネス界で営業活動を展開していた。授業の大半は平日夜間と土曜日を選択して仕事に支障なきよう努めた。しかし、自宅から南山まで片道2時間以上となる長距離通学となった。仕事との両立は厳しい試練の連続であった。授業を終えて帰宅するのが夜11時頃となり、翌朝8時には出社しなければならないハードスケジュールで3年間よく続けられたものと思うことがある。そして、平成10年3月待望の修了式を迎えることができた。修了式では最年長である私の還暦卒業が話題となった。

「そんな年齢で、しかも長距離通学してまでな

ぜ大学院に来たのか」といった質問が多かった。私は「学びたいが契機」「可能性への挑戦が最大の動機」であることを強調した。

修了後の翌年（平成11年）から南山大学経営学部「現代産業論」の講師を務めることになった。70歳の定年まで10年間教壇に立つことができた。若い学生達と夢を語り合うことはとても楽しかった。成績評価はレポートで採点したがレポートをみて学生諸君の考え方から教えられることも多かった。

昨年、古希記念として「可能性へのあくなき挑戦」というタイトルの拙著を出版した。その中で古希を夢実現の始発駅として捉え夢を形にする新10カ年計画をデザインした。「悠々自適」型でないアクティブなライフデザインである。古希：夢の始発駅のプラットホームには多くの挑戦が待ち受けている。人的資産形成への挑戦、可能性への挑戦、クオリティーの高い人生への挑戦、多面的人生への挑戦、そして変化への挑戦などである。南山大学の建学の精神である「人間の尊厳のために」をこれからのライフデザインのなかで活かしていきたいと思っている。

## 私と南山

院40期 経営 山 路 熟

南山大学大学院経営学研究科博士前期課程を卒業して10年が経ちました。10年と言っても私の入学は40歳の前厄、そして41歳の本厄でこりゃ卒業は無理だろうと休学を考え、担当教官の後藤邦夫助教授（現：情報理工学部システム創成工学科教授）へ相談に行ったのですが、休学＝退学だね！との一言で思い直し、後厄で何とか卒業出来たという社会人学生のお話しであります。

そんな社会人学生の私は、わが社の新入社員たちより若い学生さんたちと同じ環境で学ぶわけがありますから、40歳の新生は大学の生活に慣れるまでけっこう気苦労がありました。南山大学大学院に進学してきた学生達は、既に4年間をこのキャンパスで過ごしてきた学生が多く、わが家のような感覚でスイスイと学年生活をこなしています。

ところが、私はそうはいきません。ちょっとした事務処理の記載方法を何度も確認したり、その提出先事務所の場所を探したりするところから始ま

るわけあります。キャンパスから最寄りのトイレへ行くにもそう簡単にはいきません。学生食堂の位置もしかり、お金を支払う方法もピュッフエスタイルで後払いかな？ 食券購入で先払いかな？ といった感じで周りの様子をうかがってから行動開始でありました。そんな生活にも慣れ、徐々に若者達と親しくなり、社会人入学の人たちとも交流が出来て楽しく過ごせるようになったのは半年ほど経ってのことでした。

私が南山大学の大学院を選んだのは、当時まだまだ未開拓なインターネットについての勉強と研究が出来る大学院と云うことが理由です。南山大学には経営学部情報管理学科というコースがあり、この学部生は工学部の学生並み、いやインターネットの研究に関してはそれ以上の授業とゼミを経験してきました。そんな学部生の生え抜きが揃う南山大学大学院経営学研究科の後藤ゼミは正に工学部はだしの授業内容でした。そんな中で20年前に何とか経済学部を卒業した私にとって

工学部系の数式はちんぷんかんぷんで、経営系のマーケティング論とか組織論の授業の方が馴染みやすかったわけでありました。

更に次なる難題は、修士論文提出までに語学検定2科目を取得のことでありますが、外書講読などここ20年以上生活に全くありません。何度も何度も挑戦の末にやっと合格しましたが、語学検定科目選択を急遽教務課にお願いしてマーケティング論から組織論に変更などと、試験

難易度の情報収集によって突破するという語学力より世渡り力で勝負ありました。

そんなことで、私の次なるビジネスに必要な不可欠として学びの門を叩いた南山大学大学院、当時はとても辛い3年間でしたが今にして思えば楽しい思い出と、貴重な経験であります。同窓生のみなさん！社会人大学院生としてもう一度南山大学のキャンパスライフを楽しんでみてはいかがですか。

## 私と南山 - 3つの関わり -

院49期 経営 渡 部 幹 郎

私と南山との関わりは、サラリーマン生活を終えて、六十の手習いとして大学院で経営学の研究を始めた時からです。大学院では素晴らしい仲間恵まれ、有意義な学生生活を満喫することができました。また、念願の研究テーマでしたので、在学中は研究に専念することができました。これも指導教授をはじめとする諸先生方からの懇切丁寧なご指導の賜と心から感謝しております。これからは、有為の人間になれるよう、いっそうの研鑽を積んでいきたいと思っています。

南山との関わりの中で、今も続いていることが3つあります。1つ目の関わりは「人間の尊厳」についてのことです。「人間の尊厳のために」という教育モットーを掲げている南山大学で学んだことにより、身近なこととして考えるようになりました。前学長のマルクス先生が、大学の構内で誰にでも「こんにちは」とお声をかけられているお姿を見て、心を打たれたことを思い出します。以来、相手を思いやる気持ちを心の基盤として、日々心豊かな生活を

送れるように努めております。

2つ目の関わりは「名古屋図書館」です。図書館には安らぎの空間があり、豊富な蔵書の中から古典といわれる名著を探して、のんびり読書を楽しんでいます。

3つ目の関わりは名古屋キャンパスの「桜並木」です。毎年、桜の木はアカデミックに咲き誇って、新入生に喜びと幸せを運んでくれます。満開の桜を眺めることで希望が湧いてきます。そして、「樹」のパワーを貰って1年の計画を立てています。

これらの関わりは、私にとって楽しみでもありません。同窓会三重支部が創立50周年を迎えられたことを、心からお喜び申し上げます。また半世紀にわたり、三重支部を運営してこられた歴代の役員の方々と会員の皆様のご尽力に感謝しております。これからは、同窓会との関わりが4つ目の楽しみになるように、行事には積極的に参加したいと思っています。



平成17年度南山大学同窓会三重支部総会 H.17.6.11 於 西日市シティホテル

## 編集後記

南山大学同窓会三重支部50周年にあたり、「南山大学同窓会三重支部50周年記念誌」の発行を坂寄支部長が提案された時は、本当に出来るのだろうかと半信半疑でしたが、寄稿の声かけに皆様快く応じて下さり、予想以上の原稿が集まりました。熱い想いいっぱいの原稿をお寄せいただき本当にありがとうございました。お一人おひとりの南山大学で過ごした青春の輝きの一ページが文面からひしひしと伝わって参ります。この熱い想いが同窓会の原動力だと確信致しました。

これからも三重支部の同窓会活動を通じて、一人でも多くの同窓生の方と熱い想いの輪を広げて行きたいと考えております。今後ともなお一層三重支部の活動にご協力いただきますようお願いいたします。

(国友)



平成13年に開催された幹事会

※本誌中の写真の一部は「南山大学同窓会50周年記念誌」「私の中の南山」に掲載されているものです。

### 南山大学同窓会三重支部50周年記念誌

発行日 平成22年3月31日  
発行者 南山大学同窓会三重支部  
支部長 坂寄克彦



旧大学講堂(現南山学園本部)



南山大学  
校章



NANZAN  
UNIVERSITY

2002年6月に決まった、新しい  
シンボルマーク。



中央聖堂(現存せず)、講堂(右)、ピオ十一世館(左)の建築計画図。枳中方面からの描写。